

現実無視の「頭をそろえる」教育

現代の教育界には、一般に、「教育の理想は、すべての人間に、“平等”な学校教育(出来れば大学まで)を受けられるようにすることだ」という考えがある。従って、世の中には立派な人間がおり、だめな人間がいるのが現実であるのに、その現実を見ようとせず、能力別指導をしたり、英才教育をすることは、ひどく悪いことであるように非難する傾向がある。

しかし、「性相近し、習相遠し」と孔子が述べているように、人間を教育しなければ、遺伝的に優れている人間も、劣った人間も、それはどの差はないものである。教育することによって差が生じ、教育をうんとすればするほど、その差が広がっていくのである。

子どもたちに駆けっこをさせてみるとよい。力を抜いてだらだらと駆けさせると、そろって同時に決勝点に到達する。しかし、全員に力を尽くして駆けさせれば駆けさせるほど、それぞれの差が大きく広がっていくことがよくわかるであろう。

私は、個人差がよく現われないような教育など、手を抜いた教育だと思っている。差が大きく現われれば現われるほど、それは良い教育

だと思っている。

私の研究所(石井教育研究所)には、二、三歳の幼児が、母親と共に来るようになっていて、その幼児たちを私が直接指導するのであるが、この二、三歳の幼児にして、すでに同じ教育に対する反応に大変な差があるのである。

六人一グループとし、これを集団指導しているのであるが、指導すればするほど差が広がっていく。こういう指導を試みれば、「頭をそろえる」教育がいかに現実を無視した非教育的な行為であるかがわかる。

六人の能力がそろっている場合と格差がひどい場合とでは、個人の伸びにひどい違いが生ずる。後者の場合は、素質の良い子どもの伸びも、悪い子どもの伸びも共に良くない。六人のグループでこれである。

だから、英才だけを集めて教育することも必要である。それなのに英才教育に対する風当たりが強い。「英才を集めて教育しているのではない。単に、英才にする教育をしているのだ」と断って英才教育をしている人を私は知っている。情けないことだと思う。